栗駒町文化財調査報告書第２集

鶴　丸　館　跡

栗　駒　町　教　育　委　員　会

序

栗駒町岩ヶ崎の街の北側に険しい丘が続いていますが、これが鶴丸館跡です。

この館跡は、当地方の代表的な中世の連郭式山城で、町の象徴になっています。

かねてから町では、館山を公園化して広く住民一般に活用させるため、事業をすすめておりました。今回は、館跡としての学術的な記録を残す目的で国・県の補助で、測量調査を実施しました。

調査がすすむにつれて、鶴丸館跡の規模の偉大さと、構造の険しさが明らかにされました。調査に当たられた方々のお話によれば、館跡の規模および構造は、県北有数のものだということです。

これからも、町のシンボルとして大切に保存しながら「史跡公園」として大いに活用していきたいと思います。郷土の史跡の意義を正しく啓発し、ふるさとへの愛着心を育んでいかなければならないと考えております。

調査のためにご協力くだされました宮城県教育庁文化財保護課の職員および東北地形社のみなさんに、心から感謝申しあげます。

昭和53年３月

栗駒町教育委員会

教育長　高　橋　盛　夫

目　　次

序……栗駒町教育委員会教育長　高橋　盛夫

Ⅰ　調査に至る経過……1

Ⅱ　遺跡の立地と周辺の遺跡……1

Ⅲ　遺跡の内容……2

Ⅳ　文献的考察……7

例　　言

1　遺跡名　鶴丸館跡（宮城県遺跡番号　43035）

2　所在地　宮城県栗原郡栗駒町岩ヶ崎字裏山

3　調査主体　栗駒町教育委員会

4　調査担当　宮城県教育庁文化財保護課

5　調査員　佐々木茂楨　後藤彪　斉藤吉弘　小井川和夫　加藤道男　高橋守克　阿部恵

6　調査期間　昭和52年５月20日～８月31日（測量調査）

7　調査面積　146000㎡

8　本書は、文化財保護課職員の協議により後藤彪が執筆、編集した。

Ⅰ、調査に至る経過

鶴丸館跡（別称岩ヶ崎城）は、栗駒町岩ヶ崎の町並の北、字裏山にあって、その名称のごとき雄姿をみせている。

この遺跡は、中世に富沢氏が、藩政時代にあっては伊達家の家臣石母田氏や田村氏、中村氏などの歴代の居館が営まれたところとして知られている。今日の栗駒町はこの館を中心にして政治、経済そして文化が展開し、発展してきたといってよい。

それだけに、この地域の人々がこの館に寄せる親近感と関心は、とりわけ高く、現に東部平場の一部は蛭子公園として活用され、春は桜の咲き競う町民憩の場となっている。

文化財は人々に愛護され活用されてこそ今日的な意義をもつものと考えるとき、この歴史的遺産の公園としての活用は、まさしく時宜を得た有意義なことといえる。

昭和49年になり、町当局は鶴丸館跡の公園化構想を提案し、その活用範囲の拡大を打ち出すに至ったのも、このことを踏まえたものであった。

そこで、より望ましい館跡の活用はどうあるべきかを公園化計画策定の前段階で検討した結果、「館跡を文化財の観点」からとらえるべきと考えた栗駒町教育委員会では、その調査指導を宮城県教育委員会に依頼した。

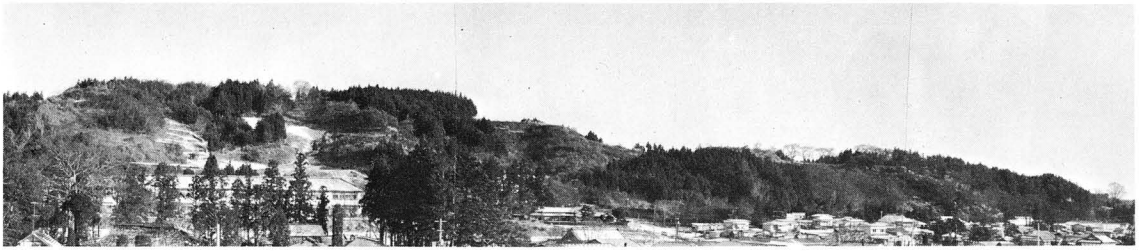
県教育庁文化財保護課では、再三の現地調査を踏まえて、館跡全体の地形測量図の作成が当面最優先の仕事と判断し、これを町教育委員会に提示した。この案にそって町教育委員会は昭和52年度の文化庁国庫補助事業として測量調査を実施した。

測量調査は昭和52年５月20日～８月31日までの間におこなった。今回、対象としたのは、館跡の主要部と考えられる約146000㎡である。

Ⅱ、遺跡の立地と周辺の遺跡

鶴丸館は、栗原郡栗駒町岩ヶ崎字裏山に所在し、栗原電鉄栗駒駅の北、約500ｍに位置する。

館跡の所在する宮城県北西部の地形を概観すると、西には奥羽山地（標高800ｍ～1600ｍ）が南北に縦走し、そこからゆるやかな起伏をもつ数多くの丘陵が東に延びており、全体として陸前丘陵と呼ばれている。陸前丘陵は、奥羽山地に水源を発する河川およびその支流によって開析され、複雑な樹枝状をなし扇状地性低地（迫川低地）に続く。陸前丘陵は県北西部では、



鶴丸館跡遠景（南から）

迫川、荒雄川によってさらに北から磐井丘陵、築館丘陵、玉造丘陵に細分される。

栗駒町岩ヶ崎地区は、北部が磐井丘陵、南部が築館丘陵、それらにはさまれた中央部が迫川低地との３つに分けられる。岩ヶ崎の町並や水田は、三迫川によってできたこの迫川低地上に開けている。

この地は、金成町沢辺から栗駒山を経て秋田に通じる旧羽後岐街道、南は一迫町真坂、北は岩手県一関に通じる旧上街道の交叉点にあたり、交通上要衝の地であった。

岩ヶ崎の町並のすぐ北には、磐井丘陵から南東に樹枝状にはりだした小起伏丘陵がせまっており、館跡はこの丘陵上に立地している。

頂部に立つと南には、岩ヶ崎の町並と水田、その間をぬって東流する三迫川、築館丘陵を一望に見ることができる。また、築館丘陵を横断した旧上街道は、本館の下を通りさらに館南東麓をまわり北東に延びている。

館跡の東端部は、現在、蛭子公園として利用されているが、大部分は山林であり、一部、畑地、草地になっているところもある。この館跡は全体的に保存状況が良好である。

本遺跡周辺には縄文時代以降多くの遺跡がみられるが特に館跡が多い。本館跡のある丘陵上の西に黒岩館、北東に樋渡館（鳥谷館）、東南東の独立丘陵上に田中館、里谷森館、南の築館丘陵上に八幡館、臥牛館（伏牛館）などの館跡の存在が確認されている。

これらの館跡の中には南北朝争乱期に名前の知られるものもある。

Ⅲ　遺跡の内容

遺跡の範囲は第２図に示した通りである。東西約650m、南北約400mで、ほぼ台形の区画をもっており、面積は約230000㎡である。

北は通称八幡沢、南は迫川低地に接する急斜面で画されている。西は山根丁から北東に入りこむ沢、八幡沢から南西に入りこむ沢、東は末町から北西に入りこむ沢、八幡沢から南西に入りこむ沢によって画されている。

したがって、本館跡は、東西に延びる丘陵を自然地形を利用しながら東と西を掘り切りによって切断してつくられたものであるといえる。

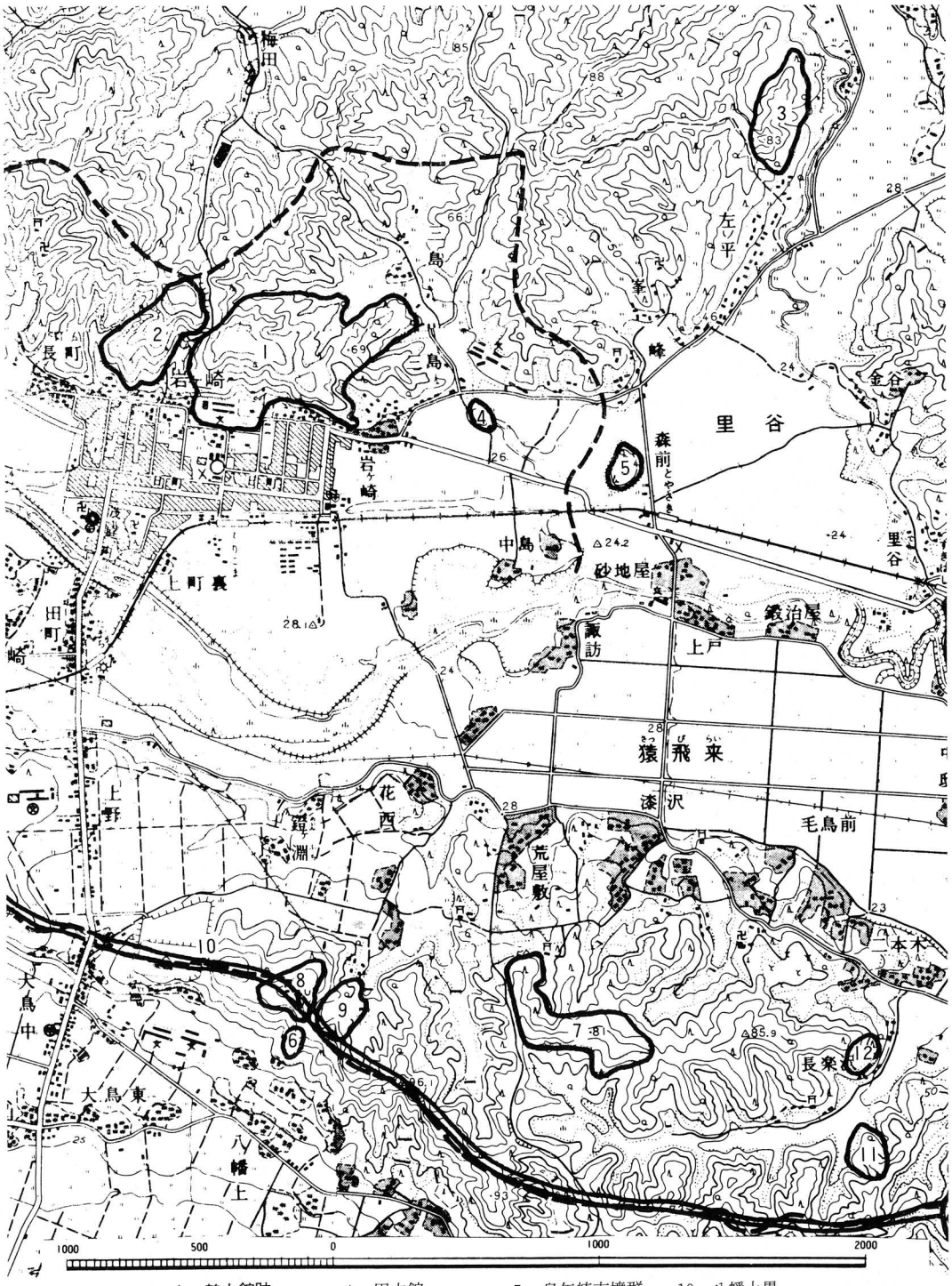
今回の調査は、北側および東端の一部を除く約146000㎡を対象に実施した。

館跡の内部には、平場、土塁、腰郭、通路、土橋、掘り切り、井戸などの遺構が認められた。館跡は、掘り切りや沢によって４つの地区に区分することができる。４地区を西からＡ～Ｄとした。

Ａ地区

もっとも高い平場をもつ地区である。

標高約100mでもっとも高い、ほぼ三角形の平場（第１平場）がある。本館跡では最も広く、



1	鶴丸館跡	4	田中館	7	鳥矢崎古墳群	10	八幡土塁
2	黒岩館	5	里谷森館	8	八幡館	11	長楽寺跡
3	樋渡館(鳥谷館)	6	八幡遺跡	9	臥牛館(伏牛館)	12	猿飛来館

第1図　周辺の遺跡

面積は約4300㎡ある。この平場には、本丸跡とする口伝がある。

第１平場より約9m低い南に突出する長方形の平場（第２平場）。第２平場の西に、第１平場より約30m低い半円形の平場（第３平場）。第２平場の南に第１平場より約25m低い半円形の平場（第４平場）。北側斜面には第１平場より30m低い北東方向に細長く延びる平場（第５平場）がある。

第１平場の東端には、Ａ地区とＢ地区を画する掘り切りに通じるカギの手状のくぼみがみられ、これは通路と考えられる。

第１平場南西部には、コの字状の高まりがあり、第２平場と連結する通路が認められた。

第５平場の先端部には、東西に走る掘り切りがあり、２つの地区に分けられる。南側の地区を5a平場、北側の地区を5b平場とする。

5a平場には数段の小さな段があり、5b平場に向って傾斜してゆく。その基部と先端での比高は5mある。5a平場と5b平場は土橋状の遺構によって結ばれている。さらに5b平場の南端には、部分的ではあるが高さ約1mの土塁状の遺構が認められた。なお、この土塁は土橋状遺構と対応する部分が約1.5mの幅でとぎれており、この部分に門跡の存在が予想される。

第５平場東西両面の沢には、人工的な改変が加えられた長方形の平坦面が数個あり、そのおのおのを連結する部分は狭くなっている。一種の防禦的施設と思われる。

その他の遺構としては、第１平場から14m低い所の北斜面には腰郭がある。その南半は公園計画の幹線通路によって壊されており、規模は不明である。また、この腰郭の西端には、高さ約1.5mの地山けずりだしによる土塁状の高まりがある。

Ｂ地区

尾根上に連続する２つの平場（第６、第７平場）と北側斜面に細長く延びる２つの平場（第８、第９平場）によって構成されている地区である。

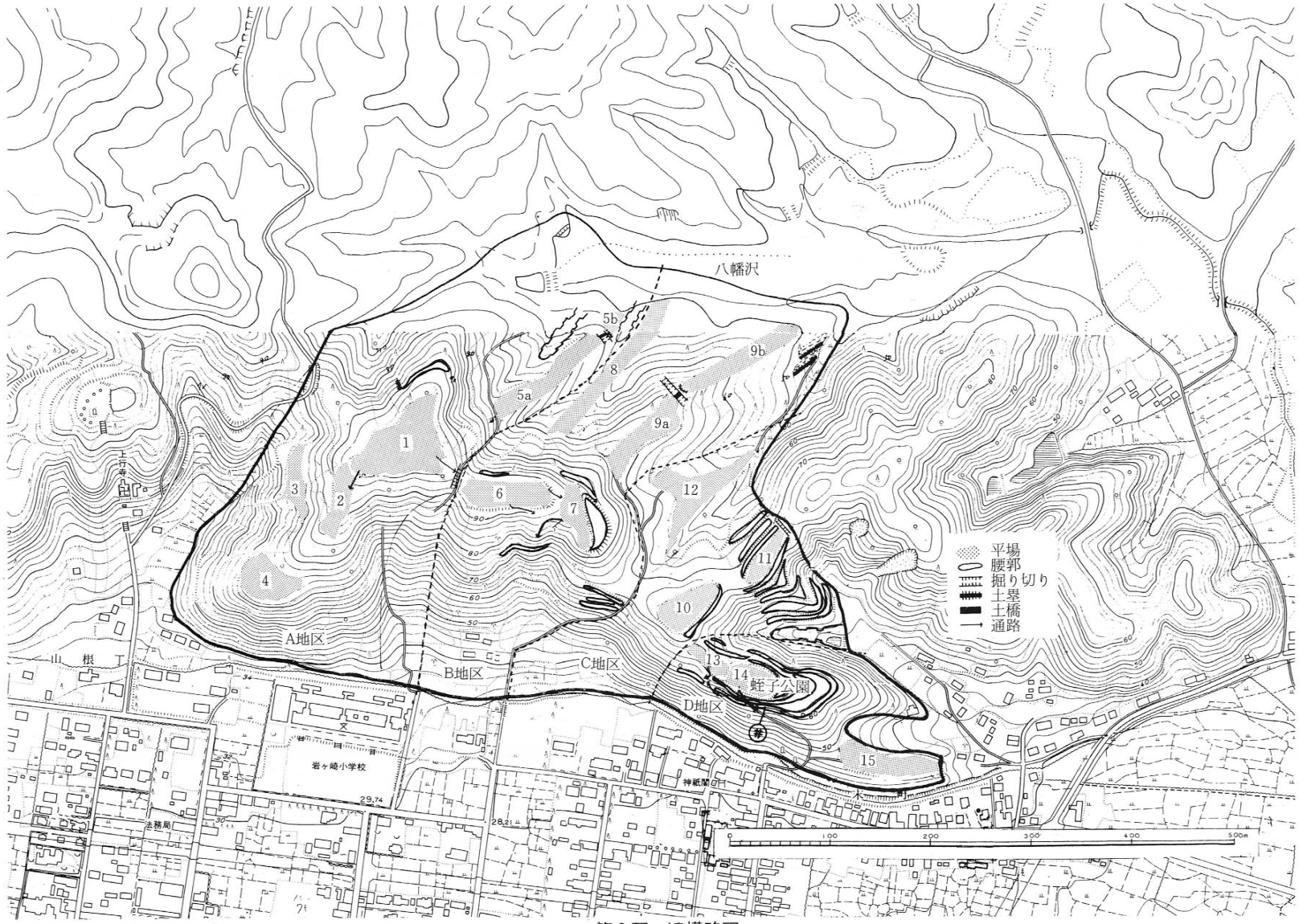
第６平場は、Ａ地区第１平場と掘り切りによって画されており、本館跡において２番目に高く、東西に長い長方形をしている。第１平場との比高は約8mある。第７平場は第６平場より約7m低く、南北に長い長方形をしている。第８平場、第９平場は、第６平場より約20m低い。北東に細長く延びており、平場先端に向ってなだらかに傾斜している。

第６平場の東端と南側中央部には、第７平場と連結する通路が認められた。

第６、第７平場の南、東、北には数段の腰郭が段違いにめぐっており、第７平場の南西および北東には、この腰郭と連結する通路が認められた。

第９平場には、平場中央部で北西－南東に走る掘り切りがあり、２つの地区に分けられる。南西の地区を9a平場、北東の地区を9b平場とする。

9b平場の南端には、掘り切りにそって、土塁状の高まりがある。また、掘り切りには、9a平


八幡沢
5b
8
9b
5a
9a
1
3
2
6
7
12
4
11
10
13
14
蛭子公園
15
A地区
B地区
C地区
D地区
平場
腰郭
掘り切り
土塁
土橋
通路
岩ヶ崎小学校
法務局
神紙関
29.74
28.21
100
200
300
400
500m

第２図　遺構略図

場と9b平場を連結する土橋状の高まりが認められたが、この付近は改変が著しく、判然としない部分がある。9b平場の北東には、平場の延びと平行に2本の土塁が走っている。

C地区

北東に延びる尾根上にある2つの平場（第10平場、第11平場）と北側斜面に細長く延びる平場（第12平場）で構成されている地区である。

第10平場の南西部分は、道路とりつけの際、壊されており、規模等は不明である。現在残っている部分は、ほぼ三角形である。第11平場は第10平場より約3m低く、北東に長い長方形をしている。第12平場は第10平場より約11m低く、北東に細長く延びており、平場先端に向ってなだらかに傾斜している。

第10平場の東には、1段の腰郭がある。

第11平場の北東端には、北西－南東に走る掘り切りがある。この掘り切りの北東部の丘陵には、遺構は確認されなかった。また、第11平場の北東端から掘り切りに通じる通路が認められた。第11平場の西には3段、東には5段の腰郭がめぐる。

第11平場の南東の沢には、第5平場の東西の沢と同様に人工的な改変が加えられた長方形の平担面が数個あり、そのおのおのを連結する部分は狭くなっている。

D地区

現在、蛭子公園となっている地区で、連続する2つの平場（第13、第14平場）と東に延びる細長い平場（第15平場）で構成されている。

第13平場は東西に長い長方形をしている。第14平場は第13平場より約5m低く、東西に長い長方形をしている。第15平場は第13平場より約20m低く、東西に長い長方形をしている。この平場は本館東端の平場であるが、東部は宅地にするため破壊されている。

第13平場、第14平場の北、東、南には3段の腰郭がまわり、各平場の南には、この腰郭に通じる通路が認められた。

また、3段目の腰郭の通路に近い所に井戸が確認された。

以上が今回の調査でわかった事柄である。本館跡全体を概観すると次のようになる。

丘陵の尾根上に沿って弧形の平場が配置されており、それから北側の斜面に向って細長い平場が放射状に延びている。

弧形の内面は急斜面になって平地に臨んでおり、北側は沢などの自然地形を利用しながら防禦的施設が設けられている。

平場頂部に立つと眼下に開ける平地を一望のもとに眺めることができ、本館はこの南側に展開する平地や、その間をぬって走る街道等を意識して構築されていると考えることができる。

また、A、B地区とC、D地区とを比べるとC、D地区の平場には数段の腰郭がまわること

などがA、B地区と異なる。このことが、時代的変遷によるものかどうかは判明しない。

Ⅳ　文献的考察

鶴丸館の城主は文献上の初見が、富沢日向道祐であり、その後、富沢氏は明岩、直家、直綱直景と五代住んでいた。

以下、富沢氏に関する文献を拾ってみる。

富沢氏は『余目記録』には「葛西れんせいの十番め子。富澤の先祖右馬助とて」とあり『葛西盛衰記』の「葛西晴信没落の事」の中には「近習衆」とある。このことから富沢氏は葛西氏に相当重きをおかれた家臣であったと考えられる。正平6年（1351年）におきた奥州の管領、畠山氏と吉良氏の抗争である岩切城合戦において、右馬ノ助は吉良方に味方し、戦功があり、とみ沢の郷を賜り、その後、道祐となのり岩ヶ崎に移り住んだと考えられる。

その後、富沢氏は葛西の家臣でありながら明応8年（1499年）には「薄衣状」によると葛西氏とは敵対関係にあった奥州探題大崎氏に味方し、葛西の中心勢力であった水沢城主柏山氏に殺されたことを知ることができる。殺されたのは富沢氏の誰であるかは不明であるが、その後も大崎氏に仕えていたことがうかがわれる。

天正7年（1579年）に富沢日向守直綱が主である葛西晴信に逆意をいだき晴信に鎮圧され、その罪を許されたことを『葛西盛衰記』『奥州葛西関係文書並びに目録』により知ることができる。しかし、その後もたびたび葛西氏に対して反逆を企だてていたようである。

遊佐木斎の『紀年録』によれば直景の時、「道海」の補佐により、その勢力がますます盛んになり、二ノ迫の上形氏を滅ぼし、勢力を拡張していったと思われる。

天正15年（1587年）以降は伊達氏に通謀し、伊達氏に相当、信頼を得ていたと考えられる。しかし、富沢氏は、本来の主である葛西晴信が天正18年（1590年）、秀吉に領地を没収されるにあたり、「近習衆」として晴信の軍に加わり、佐沼城の戦いに参戦している。そして、その後に起きる天正18年（1590年）の葛西、大崎の百姓一揆に加担し、岩ヶ崎における富沢氏は滅ぶ。

その後、鶴丸館は『封内風土記』によれば、伊達宗綱、伊達宗信、石母田大膳宗頼の居城になったらしいが、宗頼の時、現在の岩ヶ崎小学校敷地、中村氏宅の所に移り住んだと思われる。

山城の鶴丸館が何年に廃絶されたのか正確な年代は不明である。

なお、『封内風土記』に言う「東館」とは、現在蛭子公園となっている部分を言うものと思われる。

以上のことから鶴丸館は、正確な築城、廃絶年代はわからないが、中世から近世に至る二百数十年間の長きにわたって使用されていたことがわかる。

鶴丸館に関連する文献（鶴丸館に関する文献を抜粋したものである。）

仙台領古城書上「宮城県史」28所集

「一岩ヶ崎城　東西五十六間　南北二十八間　城主富澤日向」

仙台領古城書立之覚「宮城県史」30所集

「一岩ヶ崎城　東西五十六間　南北二十八間　右城主富江日向ト申者、罷在候由申傳候」

封内風土記「仙台叢書」別巻3所集

「號二鶴丸一。傳伝。富澤日向直景所レ居。而高祖道祐。曾祖明岩。祖父直家。父直綱五世相継住二于比一。」

余目記録「仙台叢書」第7巻所集

「葛西れんせいの十番め子。富澤の先祖右馬助とて。所帯の一所も不レ持。こうとう（口頭）ばかりして候よし。又うはかた（上形）先祖かいめうしゅさんとて是も在家の一宇を不レ持。但かの仁は内力候よし。有時雨中に徒然のあまりに。典廐しゅさんの方へ立越て云。爾もか程の国あらそひの御弓矢に侍と成て。身をもたざるは口惜しと。いはくしゅさん如何とたずね候に。馬具足ををしもち候はゞやすかるべしといふ。しゅさん。さらばそれがししちに取候具足。同馬一疋借進べしとて。二人奉公にいづ。但一所に罷出候ては。自然軍無レ曲してはかなふまじ。吉良。畠山御両所へ可二罷出一し。一方かち給候はゞ。こゝろへをもって何も身をもつべしと思案をめぐらし。しゅさんは畠山かたへいで。なかたの城にこもる。てんきう（典廐）はこまさきへいで。吉良殿に奉行す。しゅさんひそかにいで。典廐にいはく。明日調議をさてたまへ。今夜つかねのぬきとをしを。地とこ五寸おきて。鋸（ノコギリ）をもって十本ばかりひききるべし。御身かまを持つめ給へ。我らやりをもちて役所をこらへ。ぐそくのうえばかりつくべし。其時かまにてぬきとをしを引給へ。やすくやぶれべしとをしへければてんきう。吉良殿に参て。明日彼城責られべし。それがしさきがけを仕。やすく御本意をとげべしと申。さらばとて御調義有て。そのごとく破給ふ問。三間は海也。落所なくして舟にてかいどうへおち給ひて。其儘二本松殿に成給ふ。其時の忠節により□□（うはカ）方には二迫三国郷を被レ下。富澤には三迫とみさはの□（郷カ）を（タマハ）給る。其後いせいいやましにて。富澤。三迫。高倉庄七十三郷。西岩井のこほり三十三郷のぬしたり。うは方は二迫。栗原。小野。松庄二十四郷今に知行す。吉良殿は大崎御いせいたる間。弓矢をすて。是も安達郡へのぼり。しほの松三十三郷計持給ふ。」

薄衣状「伊達正統世次考」所集

「明応八年己未。十二月十三日。奥州磐井郡東山住人。葛西一族薄衣美濃入道経連。遣二蓮阿弥佛一献レ書請二援兵一。其略曰。…（中略）…抑上形富澤二人。以二一己之私一。令二二迫彦二郎切腹一。實過分之僻事也云云。然以二古川之計畧一。富澤河内守獨被レ赦二其罪一。因河内守一向守二公方一。致二奉公一。而柏山伊豫守重朝又妬レ之。興二金成黒澤一。共挾二野心一而殺二害河内守一。其次第難レ

述二言語一焉云云。…(中略)… 庶幾公方一門。一迫氏又立二一陣於栗原一。則上形富澤亦可レ屬レ之。」

葛西盛衰記「仙台叢書」第7巻所集

「三之迫岩ヶ崎城主。富澤日向守。葛西晴信へ逆心。大崎へ附んとす。晴信是を被レ聞。東山黄海深掘之城主。深掘新左衛門尉を討手に被レ向。富澤降参す。宥免あり。是を岩ヶ崎陣といふ。

奥州葛西関係文書解説並目録

「今度富澤日向守逆意、其辺野心之輩令二同心一、流大門迄出馬之刻、寺崎岩見守ニ打続、早速走向無二之動(ママ)無二比類一候。依レ之岩井郡之内五串村ニ而五千苅、沖田村ニ而三千苅、永代宛行者也。仍証文如レ件。

天正七年三月二十七日　　晴信（香炉印）

石川丹波守殿」

「此度富沢日向守直綱逆意、岩井郡於二清水一及二一戦一候処、其方智略ニ而、直綱勢之内武勇第一之大鳥刑部少輔を討取、故直綱敗軍、三之迫城迄押詰得二勝利一事、於二葛西一、前代未聞候、依之為レ賞桃生郡寺崎之内五千苅、大森山之内五千苅、太田之内二千苅、中津山之内三千苅、本領相添為二感状一宛行者也、仍証文如レ件。

天正七年三月二十八日　　晴信（香炉印）

増子左七郎殿」

「今度其許依二先例一宛行之内、栗原富沢日向路一ノ迫之内三千刈、岩井黄海ノ内弐千刈、日形及金成郷ノ内弐千刈、右子細不レ可レ有。他防あらは可二申出一、為二永代一、依而如レ件。追而知行書可レ宛行一事也。

天正十四年七月十四日　　晴信（花押）

増子与左ェ門殿」

成実記「仙台叢書」第3巻所集

「天正十五年正月十六日、大崎へ被二仰付一。御人数大将には。…(中略)…其外諸軍勢共遠藤出羽城に而候、松山へ着陣、被レ仕候。於二大崎一伊達へ御奉公は。氏家弾正、湯山修理、一栗兵部、一迫伊豆、宮野豊後、三迫の富澤日向。何れも岩出山近邊の衆に候」

伊達便覧志「仙台叢書」第3巻所集

「氏家弾正反逆。附大崎群臣集二中新田一事。

……應諾の御返答有しかば。弾正大に喜びける。さて弾正が党には。湯山城主湯山修理、一迫伊豆。宮野豊後。三迫城主富澤日向貞連。皆心を弾正と一つに定め。伊達の御助力をぞ頼侍ける。」

伊達家治家記録

「天正十六年二月八日

大崎ノ家臣玉造郡岩手澤城主氏家弾正吉継ヲ始メトシ湯山修理助、一栗兵部、一迫伊豆、宮野豊後併ニ葛西左京大夫殿家臣三迫城主日向等当家ニ心ヲ通ス。」

「天正十六年閏五月二十日

葛西左京大夫晴信家臣富澤日向守貞運ニ飛脚ヲ以テ御書ヲ賜フ、其趣、氏家弾正弓箭迫日存分ノ如クナル由肝要ニ思サル、富口御備ノ事定テ其聞エ有ヘキカ。

奥州葛西関係文書解説並目録「水沢市史」所集

「今度小田原に於て仕合万々存分の如くにて候て下向候、之に依て伝僧相越され候、大慶に候、然して当会津の儀は関白へ申合せ始末候て、先以て御蔵所に定め置かれ候。殊に近日中関白当会津へ御下向候て、奥州、出羽を仕置の儀、政宗に御意見あるべきの由御内意候、旁御満足同意たるべく候が、和賀、稗貫、南部迄の御意に候、旁々本意の義随分馳走せしむべく候、次に氏弾死去の節に無二に助入られ万々賦る故岩手堅固の由に候、祝儀浅からず候、小惣相返され候は、彼地番伝一味中に相談尤ニ候、残慶来音を期し候、恐々謹言。

御用心致すべく候につき自筆に及ぶ候。

即ち火中～以上

(天正十八年)
七月七日　　政宗（花押）

富澤日向守殿」

木斎紀年録「仙台叢書」第4巻所集

「道海本二本松畠山義氏家老也。天文年中有二家裏乱一出二奔于磐城一。後客二於会津一、遊二暦於諸家一有二抜群之戦功一。而来二于大崎一、見二其負者一則不レ問二知與レ不レ知。不レ聞二理與レ非而併レ力救レ之。以レ獲レ勝為レ悦而已。然所レ適多不レ合矣。寓二于三迫富澤左金吾一、而守二護其家一。以レ有二親戚之故一也。此時富澤筑後守死。其子猶幼少諱不傳後稱左衛門為二隣郡近郷見レ攻不レ能二自立一。自下道海有二軍略一助上レ之。威風大振。葛西大崎無下敢與二三迫一抗者上。皆入道之力也。金吾成長之後。道海入道終住二于二迫門地城一。與文字同二迫本非下三迫之領知上。嘗屢戦互為二勝負一。道海撃二取之一。一云二鶯澤城一者二迫氏居城也。二迫亡。故道海居二于鶯澤一也。」

葛西盛衰記「仙台叢書」第3巻所集

「葛西左京大夫晴信没落の事

……近習には。富澤日向守、寺崎石見守」

伊達政宗覚書案「宮城県史」30所集

「一葛西大崎牢人衆、富澤日向守、一迫刑部大輔、宮野式部、此外一両輩、于今抱置申事、付葛西方之事」

浅野長吉長政書状「宮城県史」30所集

「以上

御札拝見申候、奥口之儀無御由(油)断由被仰越候へ共、未一左右無之儀候、富澤(日向)、一迫(刑部)、其外何も其方ニ被拘置候者足弱子供、早々給候へと申候へ共、于今一途無之候、元祐事ハ、別才覺も可仕かと存差越候、其方ゟ目付にてハ無之候、別一揆承引不仕候へハ、貴所以御覚悟、我等式迄迷惑仕候間、今朝も以使者申入候、彌被出御精、被仰付尤存候、次其様之事ハ、無御如在相見候へ共、御内衆悉侭人を仕、はかをやらす候、其御心得尤候、貴所御進退相果候をも、分別不仕衆と見へ申候　　恐惶謹言

正月九日(天正十九年)　　浅野弾正少弼

長吉(花押)

伊達左京大夫殿　御報」

封内風土記「仙台叢書」別巻3所集。

「伊達摂津宗綱居レ之。宗綱歿後。至二寛永四年一。宗綱弟伊達筑前宗信居レ之。宗信歿後。石母田大膳宗頼居レ之。然其地漸崩。狭窄而不レ可レ居。故宗頼別ト二地於壘下一居之。今中村家所レ居是也。

其二。號二東館一。傳伝。元和中。宗綱在二鶴丸一。茂庭石見綱元居レ之。」

参考文献

栗原郡教育会　1918　「栗原郡誌」

栗　駒　町　1963　「栗駒町史」

栗駒教委　1972　「栗駒町の文化財」

熊谷輝雄　1973　「岩ヶ崎館富沢日向について」『栗原郷土研究』

紫桃正隆　1973　「仙台領内古城・館」第2巻

水　沢　市　1976　「水沢市史」2中世

佐藤信一　1977　「鶴丸城の変遷」『栗原郷土研究』

「葛西実記」『小西文庫』

鶴丸館跡地形図

航空写真
（南西方向）

第5a 平場より
沢を望む

第5a 平場より
沢を望む

第５平場の西の沢
（北東より）

第13平場
通路

第14平場
通路

栗駒町教育委員会

教育長		高橋盛夫		主任	石塚美恵子
教育課長		四宮善秋	社会教育係	係長	後藤公佐
総務係	係長	佐藤成雄		主任	白鳥国彦
	主任	千葉健市	社会教育	指導員	佐藤王芳
	主任	芳賀勝江	〃		加瀬谷俊昭
学務係	係長	菊地巌	幼稚園教諭		高橋俊子

宮城県文化財保護課職員一覧（昭和52年度）

課長		千葉与一郎	調査第1係	技術主幹兼係長	後藤勝彦	調査第2係	係長	佐々木茂楨
課長補佐		木村三智夫		技術主査	高橋多吉		技術主査	平沢英二郎
管理第1係	係長	加藤忠雄		〃	早坂春一		技師	後藤彪
	主事	矢口セツ子		技師	小井川和夫		〃	佐々木安彦
	〃	三浦正義		〃	高橋守克		〃	加藤道男
管理第2係	主幹兼係長	扇正人		〃	丹羽茂		〃	一条孝夫
	主事	佐藤信子		〃	斎藤吉弘		〃	阿部恵
	〃	渡辺正憲		〃	佐藤好一		〃	手塚均
				〃	遊佐五郎		〃	阿部博志
				〃	千葉宗久			
				〃	真山悟			
				嘱託	熊谷幹男			
				〃	中島直			

栗駒町文化財調査報告書第２集

鶴　丸　館　跡

昭和53年３月20日印刷
昭和53年３月31日発行

発 行　宮城県文化財保護協会
仙台市本町３丁目８番１号

印 刷　株式会社　東北プリント
仙台市立町24－24 電話(25)6466